

春燈

2 月号

February 2014



主宰の句

安立公彦

皇帝ダリア冬の御堂を明るうす

(瑞泉寺)

日記買ふ己が齢を肯ひつ

テトラポッド短日の肩寄せあへり

群れ咲きて夕日分けあふ石路の花

十二月八日ひとに安けき目覚めあり



久保田万太郎の句

まのあたりみちくる汐の寒さかな

『道草』 昭和二年

「鮫洲川崎屋にて」の前書がある。三田の友人達と鮫洲の料理屋に集まった時、少し遅れて来た万太郎が、来るとすぐ披露したのが掲句。目にしたままの景の即吟である。「まのあたり」がさりりと出てくるところが万太郎句であり、ひたひたと寄せてくる夕汐を前に、己が身に纏わり付く寂寥感を「寒さかな」と一気に詠む。ほんとうに見事な好情詩。

小嶋 恵美

久保田万太郎の句

一めんのきらめく露となりにつけり

『季題別全俳句集』昭和三十七年

万太郎には「露」という季語を詠んだ秀作が多い。

この句は最晩年の句で、生前の雑誌、句集には掲載されていないが、小澤實氏は究極の一句であると評価されている。哀歎の波にもまれて詠い続け、漸く辿り着いた心の平安、流寓の涯に見いだしたこの世のほのかな明かりを「きらめく露」と感じたのではないか。言葉少なに余情を生み、強く心ひかれる。

清水美子

燈下集



○ 小倉陶女

み仏にともす一灯山眠る
竹林の奥の薄日や笹子鳴く
呉服屋の来てゐるらしき冬座敷
煮かへして角のとれたる大根かな
湯婆抱き己のしるひとり言

○ 荒井 慈

狛犬の阿吽ちぐはぐ神の留守
ぶつ小口斜め細切め葱薬し
枯尾花夕日つかみて離さざる
フレンチカンカン三本足の大根かな
次の世も女と決めて花八手

○ 佐渡谷秀一

拍手の空に吸はるる冬はじめ
散紅葉空を広げて行きにけり
神木の加護にすぎりて冬の虫
母の忌を修す時雨となりにけり
我が物顔の放置自転車神の留守

新蕎麦や湧水はしる城下町 (松本 旬)
湧水のかすかな甘さ冬隣
文化の日漢方薬の名を控ふ
音たてず囁む沢庵や初時雨
若き日の写真の笑顔冬ぬくし

○ 横田初美

凡の日のそぞろ歩きや帰り花

暮るるには日はまだ高し浮寝鳥

冬の霧見送る夜の尾灯かな

冬至南瓜メキシコ産でありにけり

負ひしもの捨つるもさみし年の暮

○ 沼田桂子

竹林の息のむモダン冬はじめ

笹鳴の追伸のごと鳴きにけり

風花や佳き音楽のながれくる

とどきさうな象形文字の冬の月

忘却の彼方をたぐり山眠る

○ 秋場貞枝

寒茜海より化粧ふ駿河富士

羽衣の松初富士の長袴

野仏の裾に冬蔦絡みけり

着ぶくれて親子天体望遠鏡

冬の天アイソソ彗星壊れけり

○ 宮田豊子

初霜の降りしと里の友の声

煤逃ははかなき望み古女房

夢に聞く父の謡や雪の夜

着ぶくれて釣堀に人不動なる

寒見舞蕎麦に添ひたる一筆箋

○ 佐々木新

隈笹の縁取り白く冬に入る

初冬の光芒しばし羽後の海

雪婆ひるも火点す峡の宿

片しぐれ白馬三山雲のうち

夕時雨池塘の果の仄白く

○ 呂秀文

おでん鍋盛り沢山のクラス会

寒紅の濃くて気になる鏡かな

年用意もう限界てふ同じ愚痴

社会鍋論旨不明の無神論

菊人形敵も味方も着飾りて

春燈賞

小山 繁子

第42回春燈賞に決定します。

平成二十六年一月

春燈俳句会

安立公彦

当月集

安立 公彦選



○ 渡辺若菜

茶の花や用件のみの父の文

日溜りを猫に占められ漱石忌

竹林の冬日奥へと移りけり

掃き寄する寺の落葉や日の匂ひ

笹鳴や谷戸に紛るる隠し径

○ 神田恵琳

冬靄や母はゆつたり稚いだく

新雪を透く熊笹のうすみどり

湯豆腐や考の慈顔の浮ききたる

呉竹の風の渴きや帰り花

木菟鳴くや嘗て敵機の飛びし里

○ 中嶋昌子

白妙の山茶花に日は惜しみなし

猫かむとて寄れば香に立つ石路の花

老い母を訪はむと思ふ茶が咲けば

霜の降る音なき音のありにけり

開戦日兄は学徒として征きぬ

○ 小山繁子

露座仏と頷つ日だまり冬の蝶

小春日の影が先行く切通

師の句碑のまとふ日差や冬桜

冬うらら鳴き交ふ鳶の寄り離れ

冬満月古都にしづけさ戻りけり

○ 小島昭夫

雪吊の武蔵野の空真青かな

紅唇の君のひと言実千両

鐘冴ゆる栄枯秘めたる段葛

走る人走らぬ人もしぐれけり

潮満つる七里ヶ浜の初明り (祝・春暁)

春燈の句

安立 公彦選

小春日や視界限なき九十九里 (帰郷三句) 東京 赤岡 茂子

柚子落とし古里の香にまみれけり

亡き人の座布団加ふ縁小春

着ぶくれて遠き日に会ふ従軍記

尉鷗今年も来をり文化の日

k江ノ電の揺らす家並や花八手

坂のぼる親子三人冬帽子

大綿と遊ぶ一時々妻の墓

寒雷や胸の底まで刺し通す

年の瀬や八十路翁も走るなり

アユタヤの象の背に乗る師走かな

托鉢の黄衣裸足の師走かな

クリスマス夢のツリーを見上げけり

箸袋揃ひの干支や年用意

神奈川 新海 英二

バンコク 大口 堂遊

東京 横山さくら

初雪の知らせに弾む朝かな

マフラーもて口元覆ふ通学路

藪柑子ともにかがめば道連れに

卍形の口元かたし冬座敷

のぼり来て塚のあたりの冬紅葉

竹林の午後のうつろひ石路の花

一輪に思ひすべてを冬さうび

誘はれつさそひつ紅葉散り果てぬ

父母を重ね合はする冬の雲

振り向けば父母の声とも雪催

台風のうねり残るや五島灘

試歩の道秋気は空を抱きけり

車椅子のままのシャワーや冬温し

永らへて数へ卒寿や文化の日

千葉 吉村さよ子

宮城 西川 春子

長崎 増田 菖波



余言

安立公彦

勞られぬる足もとの冬日かな

佐藤 信子

俳句の表現には、或る目的があつて作る句、例えば挨拶句や吟行句などと、日常の些事の中にうた心を見出して作る句と、大別して二つの表現法がある。この句は後者。それはまた、久保田先生の言う、「影あつてこそその形、影とは畢竟余情である」に通じる。

作者の視線の先にある冬日の温かさが、一句の具体的な表現により、余情のこもる句となっている。この句、十一月本部句会で特々選に頂いた。

鎌倉に眠る文士やみそざき

三上 程子

第二回春燈神奈川支部大会は十二月一日鎌倉で催された。参加者九六名盛会だった。鎌倉は見所が揃っている。只時問の都合で見るべき場所に制約があるのが惜しまれた。

そういう中で鎌倉文学館は多くの人が訪れた。私も宮崎

洋さんの車で瑞泉寺の帰路立ち寄った。建物の外観が背後の山にみごとにとけ込んでいる。大仏次郎、川端康成、小林秀雄、久米正雄、吉屋信子、そして久保田万太郎と、展示の資料も豊富だ。丁度館の一郭で、堀辰雄「生と死と愛」との特別展が開かれていた。没後六十年を迎える堀辰雄の展覧会を鎌倉文学館で開催するのは始めてとのこと。文学館のテラスからは、冬の目を浴びた由比ヶ浜の海が間近に見えた。久保田先生の原稿もあった。この句、「みそざき」は先生の好きな季語の一つである。

雑炊の湯気に向かうに明日探す

井上 春子

神奈川支部大会が近づいた或る日、三上程子さんから、井上春子さんが会場に見えると聞いた。療養中のこととて大会参加は出来ないが、皆さんのお顔が見たいとのことだった。会場に着くと、ロビーに車椅子の春子さんがいた。春子さんと最後に会ったのは、昭和六十三年十月の城ヶ島勉強会の折だった。お元気だった。この年の七月、安住先生が逝かれ、成瀬櫻桃子新主宰の許での勉強会だった。二年後春子さんは、浅野洋子、中野あぐりのお二人と共に春燈賞を受賞された。そういう事など話し合っていると、二十数年の歳月が消え去る思いがして嬉しかった。目の前の春子さんは少し小柄に見えたが、話しぶりなどは記

億の中の春子さんと変わらなかった。この句、「明日探す」に万感の思いが感得される。お大事に養生して下さい。

露座仏と頌つ日だまり冬の蝶 小山 繁子

高德院と聞いても首を傾げる人も、「御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす」と言えは「露座の大仏」と即答することだろう。神奈川支部大会でもこの大仏の句は多かった。今回は時間がなくて行けなかったが、以前立ち寄った折大仏の伏目がちなお顔を拝していると、いつしかわが身が大仏に曳かれるような思いのしたことを憶えている。

この句「頌つ日だまり」に、質量の異なり過ぎる二物を、文字通り頌ち置くという表現の妙を見た。

師の句碑のほのかな湿り帰り花 浅木 ノエ

当日九時半に着いた鎌倉駅はツアーの観光客で賑わっていた。ホームに「鎌倉」の唄が流れている。駅頭から宮崎洋さんの車で瑞泉寺に向かう。神奈川支部大会で最も訪れたかった瑞泉寺である。長い石段を登った門の脇に、へいつ濡れし松の根方ぞ春しぐれ 万太郎の句碑が建っていた。昭和二十三年の句。句碑建立は五十五年。

瑞泉寺の境内はさながら小宇宙の景を醸していた。彩付き始めた低山は、片側は溪に落ち他方は岩肌を巡る。その

中を細い流れが冬の目を浮かべていた。皇帝ダリアが高々と重弁の花を天に向けて開いている。この小宇宙に合う句碑は久保田先生の春しぐれの句を描いては考えられない。この句、「ほのかな湿り」が良く情景を掴んでいる。今大会で特々選に頂いた。幹事の皆さん御苦労様でした。

何もせぬ疲れ勤労感謝の日 三宅 文子

毎月の本部句会では佳句に会う。この句と次の句は共に十一月本部句会の作品。

「何もせぬ疲れ」が佳い。この季語にはこれ以外の言葉は考えつかない。同じような発想の句は他にもあるうが、中七の「疲れ」がこの句を独自の表現に仕立てている。納得出来る句だ。

音たてず囁む沢庵や初時雨 佐渡谷秀一

「沢庵」を囁む時の確かな歯応えには生活感がある。囁んでいるとそれは一つのリズムとなつて身ぬちをめぐる。この句、その沢庵を「音たてず囁む」という。音を立てずに沢庵を囁むということは、作者の心情に余程大事なものが宿っているということだ。心の伽と言つてもよい。それは「囁む沢庵や」で決定的となる。心情を日常の些事によつて俳句に仕立てあげたみごとな一句である。